は自分が日頃少しでも興味を持っているもの以外は言葉が良く分からなかったということもあるが）Industrial Exhibition も含めて，5日間盛況に発表が行われたダラスは，PAC '95が終了したちょうどその日に大洪水に見舞われたのであった。

◁研究会報告▷

1995 Particle Accelerator Conference（PAC '95）報告－3

高雄　勝（SPring-8 軌道解析 GV）

1995 Psrticle Accelerator Conference は International Conference on High-Energy Accelerators を兼ねてテキサス州ダラスで5月1日から5日まで開催された。ダラスで開催されたのはSSC研究所がホストを勤める予定であったからだが，ご存じのようにSSC計画がキャンセルされたため，ロスアラモス国立研究所が急遽ホストを勤めることとなった。参加者は1,046名，内当然のことながらアメリカ人が一番多く718名，日本人は4番目で42名であった。加速器分野における日本の貢献度を考えるともう少し多くの日本人が参加してもよいように思われた。ただし，千人を越える会議は肥大化し過ぎて散漫な雰囲気が感じられたことは否めなかった。プログラムは，初日の午前のオープニング・セッションと最終日午後のクロージング・セッションを除いて，午前と午後に口頭発表が2セッション，ポスター発表が6セッションが平行して行われた。ポスター発表の時間は午前が3時間半，午後は4時間と十分あったため，6セッションが平行していても問題はないようであったが，口頭発表では放射光施設のセッションと挿入光源を含む磁石のセッションが同時にあったため聞き漏らした話題があった。

米国の会議であるだけに，オープニング・セッションでCEBAF及びAPSの現状報告があった。CEBAFでは，4ターンで3.2GeVまで加速していた。APSでは，蓄積リングのコミッショニングが続けられており，偏光電磁石からの最初の放射光が観測された。

口頭発表の放射光施設のセッションでESRFの現状が報告されていたが，早期にビーム・パラメータのデザイン値が達成され，マシン及び挿入光源の改善で輝度をデザイン値から20倍程度上げていた。将来的には，ミニ・ギャップのアンジュレータを開発し，輝度を100倍まで持っていくことを計画している。また，ロシアの放射光施設の現状報告があり，VEPP4で多極ウィグラーから逆コンプトン散乱まで用いて1keVから6.5GeVまでの広い範囲の放射光が得られたというユニークな報告があった。磁石のセッションでは，spectrum shimming と呼んでいた特殊な方法で挿入光源の磁場の位相誤差などを補正し，15次程度までの高次のアンジュレータ放射光が利用できるようになったという報告があった。

ポスター発表ではAPSとCEBAFが統一したテンプレートを作ってプレゼンテーションを行っていたが，施設が稼働し始めたところで活気があるせいか力を入れているように見受けられた。放射光関係のセッションとしてはFEL及び放射光施設に関するものが二つと磁石のところで挿入光

(C) 1995 The Japanese Society for Synchrotron Radiation Research

源の発表があった。内容については細かくなるのでプロシーディングを参照していただきたい。

PACの全体的な印象としては，リニア・コライーダーやBファクトリーなど高エネルギー加速器が主流を占めているようであったが，放射光の関係者としてこれらに対抗するよう奮起したいと感じた。

ちょっと ひと息

モンペリエ　6
―アロハ―

モンペリエ会議のバンケットには，フォーマル・ウエア着用，とのお達しがあった。

極東地区からの田舎者は，「フォーマルウエアって，何だろう」，などと気をもんでしまう。アメリカ人の友人に尋ねると，やはり田舎っぺの彼が言うには，

「いや，私も知らなくてね。組織委員長に聞いてみたんだ。そうしたらね，背広着て，ネクタイしめて行けばいいんだってさ」

ということだった。

バンケットの前には，エクスカーションが予定されていたのだが，田舎っぺの私は，早朝から一張羅のスーツに身を固めて出かけた。バスに乗りこむために，大学の前の出発地に着いてみて驚いた。そんな野暮ったいのは，ほとんどいない。皆，ポロシャツ，柄ものの長袖シャツ腕まくり，ジーパンまたは短パン，ズック靴といういでたちである。「こりゃ何たるこった。俺ゃダマされた」

そう思った。

エクスカーションは午後の早い時間に終わった。「さあて，バンケだぞ。いやぁ，昼日中から飲み始めるなんざぁ，さすがフランス，フランス」，などと早合点していた。ところが，である。バンケットが始まる前に，会場である有名な城の中に造られた講堂で，地元の教育委員会の先生によるアヴィニヨンの歴史についての講話があるという。そのために，フォーマル・ウエア着用ということなのだそうだ。私は少々遅れて講堂に入った。階段教室のような講堂に一歩踏みこんで，二度驚いた。ジーパンも，ティーシャツも，柄もの長袖もいない。紳士はきちんとワイシャツ，ネクタイ，背広，淑女はドレス，スーツ，である。女性の衣装のことはわからないが，要するに，よそゆきをお召しであった。後で聞いたら，彼等は，別の車で，それらの服を運んでいたのである。トイレで着替えた人もかなりいたそうである。

一人だけ，青色に赤っぽい派手な柄もののアロハシャツを着たサンダルばきの旦那がいた。当時ハワイ大学にいたChuk Fadley氏であった。階段状の座席が三方の側壁から向かい合うように降りてくる形になった講堂なので，この風体はかなり目立った。彼は困った，という顔をして，まわりを見回した。隣に座った男が何か冷やかした。Fadley氏は，

「いやあ，ハワイぢゃあ，これがフォーマルなんだぞ」

と言った。辺りが静かになった時だったので，こちらまで聞こえた。周りの御婦人たちがくすくす笑った。

講話はフランス語でなされた。それに英語の通訳があった。当時は，まだ，サイマルはなかったので，講話に要する時間は倍増した。途中で，かなりの聴講者が爆笑した。

「一体，なにがおかしいの？」

私は隣席の人にささやいた。

「通訳さんがね，講師がまだ話してない部分まで通訳してしまったのさ」

（石井武比古）